タシケント国際学術会議

中央アジア社会史への新たなアプローチ

（2013 年 9 月 25 ～ 26 日　於　国立ティムール博物館）

植田　暁

2013 年 9 月 25 ～ 26 日、ウズベキスタンの首都タシケントの国立ティムール博物館 (Государственный музей истории Тимуридов) において国際学術会議「中央アジア社会史への新たなアプローチ (New Approaches to the Social History of Central Asia /Новые подходы к изучению социальной истории Центральной Азии)」が開催された。本会議はウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史学研究所（以下、歴史学研究所）、ドイツのマルティン・ルター大学、オーストリア科学アカデミー・イラン学研究所（以下、イラン学研究所）の三機関によって組織されたもので、フォルクスワーゲン財団による財政的援助を受けて開催された。

本会議は、国際学術会議の名にふさわしく、開催国であるウズベキスタンのほか、ドイツ、オーストリア、ロシア、イギリス、アメリカ等から多くの第一線の研究者が参加した。前近代から現在までの広範な時代を対象として、6 つのセッションが組まれ、計 19 件の報告がロシア語および英語でなされた。英語での報告に関しては、会場にロシア語への同時通訳のヘッドセットが準備された。筆者は 2013 年 4 月から歴史学研究所に研究生として留学しており、本会議に臨席する機会を得た。以下簡単にそれぞれのセッションと報告について紹介を行いたい。なお、報告者氏名および所属は基本的に歴史学研究所 HP [(1)] の記載によった。

Thomas Welsford 氏（イラン学研究所）による開会の辞に続き、ウズベキスタン科学アカデミー側の要人と Jürgen Paul 氏（マルティン・ルター大学）の挨拶によって会議は開幕した。個別セッションに先立ち、Д. А. Аримова 氏（歴史学研究所）による「社会史とウズベキスタンの史料学におけるそのパラダイム」と題された総会報告が行われた。

第一セッションのテーマは「マイクロヒストリー」と設定され、Б. М. Бабаджанов 氏（ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所）が司会を務めた。ソ連崩壊後の中央アジア史研究においては従来のマルクス主義史観の見直しの中で、マイクロヒストリーが注目さ

(1) http://tarix.uzsci.net/index.php/Novosti/Mezhdunarodnaya-nauchnaya-konferenciya-Tashkent-25-26-sentyabrya-2013-goda (2013 年 12 月 31 日閲覧) . 尚、実際の会議における参加者および報告内容に関して HP の告知から変更はなかった。

れてきたが、本セッションでは 3 件の報告がなされた。C. H. Абашин 氏　(サンクトペテルブルク・ヨーロッパ大学)　は「小スターリン : 中央アジアにおけるスターリニズムのマイクロヒストリー（1930 － 40 年代）」という題目で、特にソ連期中央アジア農村部におけるアクサカルやイマームのコルホーズ内での権力関係に焦点を当て、国家権力と農村の対立という単純化された構図の背後にある共生や利益関係の存在を明らかにした。A. Базарбаев 氏（ウズベキスタン共和国国立中央文書館）の報告「牧畜業者、辺境、ジザフにおけるロシア支配の結果 : マイクロヒストリーに関する小論」は、ジザフ地域への牧畜民の移住と徴税や家畜の販売といった経済活動について論じた。C. Асанова 氏（И. М. Губкин 名称ロシア国立石油ガス大学タシケント分校）は「1920 年代中央アジアの正教会の歴史の構成要素としてのマイクロヒストリー」と題して、ソ連による宗教政策のもとでの正教会の状況をマイクロヒストリーの方法論を用いて解明していくことの可能性を示した。

「比較史」をテーマとした第二セッションは、J. Paul 氏が司会を務め、Alexander Morrison 氏（イギリス、リバプール大学）が「比較史の実践 : その利点と陥穽」と題する報告を行った。まず、第二次大戦後の史学史の展開から、中央アジア史研究における比較研究の有用性を確認したうえで、自身の研究における帝政期中央アジアと英領インドの比較を例に取り上げ、異なる地域の比較の際に生じる問題と研究上の陥穽について論じた。さらに、今後は特に、ポメランツの The Great Divergence の議論を中央アジア史研究の立場からどのように捉えるのかが重要な論点となるであろうと指摘した。

T. Welsford 氏が司会を務めた第三セッションは「人物研究と人間集団の研究」と銘打たれ、人物、人間集団の分析から社会史をとらえる一連の報告が行われた。James Pickett 氏（アメリカ、プリンストン大学）が、「ブハラの貴族 : 史料、人物研究、19 世紀中央アジアの社会史」に関して、M. Тухтаева 氏（歴史学研究所）が、「集団伝記の再現 : ウズベキスタンの芸術家の個人文書を用いた作業の試み」に関して、それぞれ報告を行った。T. Welsford 氏が司会を務めた討論「『国家構造』、『モラル・エコノミー』、『農業調査』: James Scott 氏の研究の文脈から」を挟み、X. Абдурасулов 氏（歴史学研究所）の報告「穀物市場の混乱 : 1893 年秋のタシケントにおける事例に関して」は、『トルキスタン通報』を初めとする史料から当時の食糧供給に関する史実を明らかにし、穀物価格の上昇とその背景を分析した。

Beatrice Penati 氏（イギリス、マンチェスター大学）が司会を務めた第四セッションは「統計分析」をテーマとし、史料に含まれる量的情報の処理に関連した 5 件の研究事例が報告された。B. Penati 氏自身による報告「革命以前のトルキスタンにおける収入と生活水準」は、近年の世界史的文脈における経済水準の比較研究の動向を踏まえ、史料データベースから当時のトルキスタンの住民の栄養状態を再現するという試みで、革命後の内戦期の状況に関しても一定の考察を加えた。K. Якубов 氏（歴史学研究所）による、「ヒヴァのワクフ文書 : モ

スクコミュニティー内での個人の社会的行動」と題された報告は、ワクフ寄進者の社会的背景とムタワッリー（ワクフ管財人）の変遷の要因について分析を行った。A. Халияров 氏（歴史学研究所）による報告「19 世紀ヒヴァ・ハン国のワクフ文書」は、現金ワクフ制度の一般的特徴とその役割についての報告を行った。Елена Пустовая 氏（国立タシケント教育大学）による報告「中央アジアからの輸出商品の卸売価格動向（1865 ～ 1888 年）：相関分析、回帰分析の試み」は、絹、綿花、乾燥果物等の商品の価格変動の様態とその要因を分析し、そこに現れた当局の政策やロシアへの輸出の影響などについて明らかにした。Г. Асатова 氏（ウズベキスタン国立体育大学）による報告「ロシア帝国とソ連の中のタシケント：都市の社会的・民族的性格の変化（19 世紀末～ 20 世紀初頭）」は、1897 年のロシア帝国第一回センサスを初めとした統計資料の分析によって、タシケント市の言語、民族、経済的階層の復元を行った。

Г. Султонова 氏（歴史学研究所）が司会を務めた第五セッションは「文書の法律的・社会的機能」をテーマとし、法律関係史料から中央アジア社会を読み解く 2 件の報告がなされた。Paolo Sartori 氏（イラン学研究所）による報告「法律家としてのムフティー：中央アジア、ハナフィー主義、近代世界（19 世紀～ 20 世紀初頭）」は、中央アジアのムフティーにとってのハナフィー主義の意義を、特に法実践の場に即して分析し、その多面的な様相を描き出した。Н. Исматова 氏（歴史学研究所）による報告「ブハラ・ハン国（またはアミール国）におけるワクフ文書の法律的機能」は、近代においてワクフ文書の取り扱いに生じた文書の集成と更新という事例に注目し、その行為によって文書所持者が自身の権利や財産のネットワークの維持に努めたことを明らかにした。

「解釈学」をテーマとした第六セッションは、P. Sartori 氏と Н. Аллаева 氏（歴史学研究所）が司会を務め、史料解釈と史料批判に焦点を当てた 3 件の報告が行われた。J. Paul 氏による報告、「『家』の考察、12 世紀アラビア語・ペルシャ語史料における bait と khana の用法について」は、史料中の具体的な用例を取り上げながら、史料執筆当時の筆者の認識と現代の研究者の先入観との差異を論じた。О. Пуговкина 氏（歴史学研究所）の報告、「回想資料における「旧トルキスタン人」の社会的自己表現：新たな方法論的アプローチ (В. П. Наливкин に関する回想を例として)」は、著名な東洋学・言語学者であるナリフキンを題材として、回想史料の史料批判の方法論について考察した。Л. Пак 氏（歴史学研究所）による報告「共時性と通時性：ウズベキスタンの朝鮮系ディアスポラの文化現象」は、現代ウズベキスタンの朝鮮系ディアスポラの文化について紹介し、その歴史的経緯を分析した。最後の総括議論の場では、各セッションで取り上げられた新たな社会史の方法論の方向性について、活発な議論が行われた。

二日間の会議を通じて、内外から多くの研究者が参加し、活発な質疑応答や議論がもたれ

た。社会史の方法論という大きな問題設定に対して、報告者が各々の個別研究を踏まえたうえで議論を行う場が設定されたことは特に有意義であったと考えられる。ただ、本会議のテーマとかかわりの深い研究が数多く行われている日本からの報告者がなかった点は、残念であった。個人的には、普段研究所等で交流のあるウズベキスタンの研究者に加え、海外から来訪した中央アジア社会史研究の研究者たちと、意見交換が出来たことは有益であった。本国際会議で整理された中央アジア社会史研究の動向を踏まえ、参加者各々が研究をより一層発展させることが期待される。

（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）